

夏のロケット

川端裕人



夏の口外ソト

川端裕人



夏のロケット

平成十年十月十日

第一刷

(定価はカバーに表
示してあります)

著者

川端裕人

発行者

和田宏

発行所

株式会社

文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(〇三)三二六五一一二二一

印刷所

凸版印刷

製本所

加藤製本

万一、落丁、乱丁の場合は送料当方負担
でお取替え致します。

小社営業部宛お送り下さい。

©Hiroto Kawabata 1998, Printed in Japan

ISBN4-16-318020-6

¥1762

夏のロケット

ブローグ

砂嵐はやんだ。

小さな丸窓から見える赤い大地の表面には、ねじくれた山脈や巨大な溪谷、大河の河口のような地形がみてとれる。つい二時間前まで、惑星全体がのっぺりとした赤錆色の薄膜に包まれていたのが嘘のようだ。目的地である高緯度地方の溪谷も肉眼で確認することができた。極冠^{きょくかん}に近いせいか、うっすらと白いものが溪谷を覆っている。

お世辞にも広いとはいえないコックピットで彼らは体を寄せあって最終的な判断を待っていた。目的地の溪谷に先だって着陸している無人支援船からのデータと上空からの観測をコンピュータが解析し、安全の確認ができれば、あとは着陸のシークエンスを開始するだけだ。

コンピュータのモニタに緑のサインがともった。

コ・パイロット席の男が回線を開くスイッチを入れ、多少芝居がかった声で、ヘッドセットの

マイクに話しかけた。

「ミッシェン・コントロール、こちらカセイ・ベータ号、ただ今より、大気圏に突入する。すべて順調。いよいよ、人類にとって新たな一步を踏み出す時が来た」

そして、マイクを手で包み込み、小さな声で付け加える。

「このメッセージがあっちに届く二〇分後には、どのみち全部すんでしまっているがな……」

地球では何十億という人々が、遠い火星の衛星軌道から届くメッセージを待っている。アポロの月着陸から半世紀以上をへて、ようやく人類が別の惑星へ到達する瞬間を固唾を飲んで見守っているのだ。

パイロット席の男がコンピュータに着陸シークエンスの指令を出すと、着陸船のまわりに配置された大気捕捉用のエアロ・シエルが向きをかえる。かすかな振動がコックピットにまで伝わってきて、やがてそれが凜とした冬の夜に遠巻きに聞く潮騒のような音にかわっていった。

「静かだな」と誰かが言った。

コンピュータは自動的に着陸船を制御する。コックピットではモニタを凝視するのみだ。緊迫でもなければ、緊張でもない。ただ時が満ちていくのを誰もが息をひそめて待ち続ける。

エアロ・シエルにぶつかる大気の声が次第に大きくなってきた。ゴーンという通奏低音。着陸船は順調に速度を落としてつつある。

その時、スピーカーからふいに耳に馴染んだ曲が流れはじめた。

「こんなクソみたいなディスク、どいつが持ってきてたんだ」コ・パイロット席の男が笑いながら言った。コックピットのなかの空気がふっと変わる。

「ミッション・コントロールの連中のしわざだ。着陸モードに入った時に自動的に流れるように、昨日のうちにデータが送られてきていた。気を利かせているつもりだろ」

「なんでもいいが、この曲はないだろ。ガキの頃を思い出しちまう」

小さな空間を満たす曲の名前は、「フライ・ミー・トゥー・マーズ」(わたしを火星に連れてって)。極東の小さな島国のミュージシャンが作詞・作曲したミドルテンポのポップロックを、英語に吹きかえたものが二〇世紀末に大ヒットした。

誰かが曲の歌詞を口ずさみ始めると、他の連中も唱和する。船内をとりまく通奏低音に歌声がしみこんでいく。

「どうとうここまで来たか……」間奏のリフを聞きながら言った。

「長かったな」

「でも、あつという間でもあった」

「しんみりしてる暇はないぞ、生物屋や地質屋から預かってきたたぐさんの宿題のことを思い出してみろ」

「それよりも、いまのうちに着陸した時のコメントでも考えておけよ。じゃないと広報の連中がうるさい」

「アームストロングの猿真似じゃだめだ。あつちはただ地球の衛星に着陸しただけだったが、こつちは別の惑星なんだから。人類が太陽系に記す本当の第一歩なんだから」

曲が終わると、通奏低音はまるで滝に打たれるような轟音に変わっていった。窓の外ではプラズマになった大気がパチパチと火花を散らしていた。

第一パラシュートが開き、大きな衝撃が走る。着陸船のスピードがぐっと落ち、窓のプラズマも消えた。外には赤錆色の大地がただ続いている。薄い大気をかき分けるようにして、その赤錆の中に着陸船は降下していく……。

それはなんの変哲もないありふれた午後のできごとだった。

東京都大田区蒲田にあるマンシヨンの一室でちょっとした爆発事故があった。ガス爆発なのか、それとも別のなにかが原因だったのかはわからない。爆発のあった部屋の窓ガラスはすべて粉々に砕け散ってしまったが、さいわいほかの部屋への被害はたいしたことなかった。一一九番通報でいち早く駆けつけた消防の的確な対応によって延焼も最小限で食い止められた。そのさいに室内から全身に大やけどを負った意識不明の男が救出され、救急車で病院に運ばれた。

ぼくはそのニュースを仕事を終え、部屋に帰ってからテレビで知った。首都圏ローカルの一分枠で扱われるほんの小さなもので、聞いた瞬間に「ぶっそうだな」とは思ったものの、その数分後にはもう完全に頭のなかから消えてしまっていた。

翌日の朝、ぼくは科学部がある小さな部屋で不機嫌にワープロのキーボードを叩いていた。毎年夏になるとやってくる恒例のネタ、「宇宙開発事業団の来年度予算の概算要求」についてまと

めていたのだが、この原稿は書きたびに憂鬱な気分にはせられる。

「科学技術庁の概算要求によると、来年度の宇宙開発事業団の予算は二五〇〇億円で、これは最近逆風といわれるアメリカのNASAのさらに一〇分の一以下。このなかから国際宇宙ステーションの日本担当モジュールの開発費、人工衛星の打ち上げ費用などがやりくりされることになる……」

日本では宇宙開発への理解があまりにも不足している。アメリカのように派手なイベントを出できる有人ロケットを持っていけないせいもあるが、それにしてももう少しちゃんとした認知をしてやらないと日本の宇宙技術そのものが妙にちぢこまったセコいものになってしまうと思うのだ。

実際、海外の技術者に日本の宇宙技術について聞いてみると「少ない予算で多くのことをやってしまう技術力」という、当事者にとってはありがた迷惑なお誉めの言葉を頂戴することが多い。たしかにそうしたことはある面では評価されるべきことなのかもしれないが、日本の技術者は少ない予算を知恵でなんとかカバーしているだけのことで、本来ならもっと創造的な面で発揮できたかもしれない能力が、「小型化」「軽量化」なんていう日本のお家芸的分野に矮小化されてしまうことにもなりかねない。

しばらくすると、

「バカヤロー！」と科学部長の罵声が部屋じゅうにとどろいた。

部長は口を開くたびに、とりあえずのところ他人に対する罵倒の言葉を持ってくるのが礼儀かなにかだと考えているフシがある。不摂生と飽食でキタえた太鼓腹をハンパにお洒落な茶色のブ

ランド・スーツで包み、だらしく足を机のうえに投げ出して、ぼくの原稿を読んでいた。かつてアポロの月面着陸のさいに、他社にすぎがけて科学部を組織した立役者だということは知っていた。しかしそれもずいぶんむかしの話だ。いまではただの窓際のタヌキである。

「どうしてこうしみつたれた記事になっちゃうんだ」

「しみつたれた話をそのまま記事にすれば、しみつたれた記事になるのは当然です」

『独自の有人宇宙飛行の技術を開発すべき』って、そんな馬鹿げたことをおまえは本気で考えているのか」

「日本がいつまでも自らの有人宇宙技術を開発しようとは思わないのはどう考えても怠慢なんです。そのためなら情報操作だろうが世論誘導だろうが手段は選ばないつもりですけど」

「バカヤロー！ そんなこと編集局長の耳にちょっとでも入ってみろ。即刻クビだぞ。新聞記者の鉄則はわかってるな。不偏不党、公正中立、客観報道だ！ 仕事に興味を持ち込むな。このロケット・マニアめ」

客観報道が鉄則だって言うのなら、まず自分が客観冷静になるべきで、こんなことでいちいちいいトシした大人が顔を真っ赤にして怒るべきではない、とぼくは内心思った。

部長は頬をふるふると震わせ、やがてあきらめの表情でため息をついた。そして、自分でキーボードを叩き始め、ぼくの書いた原稿から二パラグラフを削ると、それを決定稿として整理部のコンピュータに送った。

「おまえみたいにちょっと目を離すとなにを書くかわからんようなやつがいるおかげで、心労が絶えない。まったく身の細る思いとはこのことだ……」

ぼくはなにとも言えなくなつて、妊娠八カ月相当の部長のお腹を見つめた。

「まだそんなに血の気が多いんなら、社会部にもっといりゃあよかったんだよな」

「それはまっぴらごめんです。早死にはしたくないですからね」

ぼくはかつて社会部の警察担当として「第一線」に身を置いていたことがある。しかし、社会部での仕事はいわば「抜いた、抜かれた」のスクープ合戦で、いつ終わるともしれない激務に心身ともに疲れ果てていた。いまとなつては悪夢のような日々だったと言つていい。

「なんでもいいけど、おまえ、もう少しマシなものの着たらどうなんだ。会社訪問を一〇年もやつてゐる万年就職浪人の学生じゃあるまいし、そのうす汚れたリクルート・スーツをなんとかしろ。シワだらけじゃねえか。ろくにクリーニングもしてねえんだろ。だからいつまでたつても嫁さんがこねえんだ」

「部長にそんなことを言われたかないですよ」

「まあ、きょうの仕事には、しわになつても悔いのないボロボロのリクルート・スーツがお似合いだらう。さつき社会部長から正式に依頼があつた。古巣の社会部の応援に、おまえを今日一日だけ借りたいそうだ」

部長はニヤニヤ笑つていた。

「事件・事故のたぐいじゃないでしょうね」

「何がどうなつたのかオレは知らんが、夜通しの張り込みくらいは覚悟しておけ。こいつは業務命令だ。さっそくあつちに顔を出してこい」

部長は言い終わるとポケットからタバコを取り出し、満面の笑みを浮かべて火をつけた。

社会部の大部屋をパーティションで区切り会議室のようになった一角に足を踏み入れると、同期入社で警視庁担当の芦川純子が待っていた。薄ら笑いを浮かべながらセーラム・ライトをくゆらせている。

「また、きみか！」

純子はショッキング・ピンクの派手なスーツを着て、自分では趣味がいいと信じ切っているらしいギンギラギンのゴールドのピアスをしていた。厚めの化粧を落としたら、実際は案外童顔で可愛いともいえないくない顔をしているのをぼくは知っている。しかし、いま目のまえにいるのは生き馬の目を抜く社会部のなかでも、まさに「そのためにわたしは生まれてきたのよ」と言わんばかりのバリバリの女性記者だった。

「まったく、いいかげんにしろよな。こっちにだって仕事の都合というものがあるんだ。それにぼくは科学部といたって文系出身なんだよ」

「そんなこと、こっちだって知ってるわよ」芦川純子は憮然として答えた。「科学部に応援を頼むって決めたのはうちの部長なんだから。それにきみに白羽の矢を立てたのはおたくの部長」

純子とは東京本社で、二三区内に点在する各警察署を担当する通称「ドサまわり」記者だったところからのライバルということになっている。こっちでは全然そんなことは思っていないのだが、どうも彼女の方で一方的にぼくのことを「宿敵」のように考えているらしい。

「ドサまわり」というのは、警視庁担当のように大きな事件を扱うのではなく、各警察署から地域内の小さな事件・事故に関する情報を吸い上げる担当のことをいう。名称のとおり記者として

は地味な存在だ。当時、ぼくはこれといった趣味があるわけでもなく、また彼女もいなかったの
で（もっとも彼女はいまもない）単に仕事以外にこれといってやることもないというだけの理
由で「ドサマわり」に熱中した。その結果、目黒区の小さな会社への不正融資事件をとっかかり
に、最終的には現職の国会議員が経営に関与している二部上場企業の乱脈経営問題にいたるスク
ープをものにした。そのころ、となりの所轄を担当していた純子は、都会議員のわいせつ強要疑
惑の追及で、各方面からふりかかるさまざまな妨害を粉砕し鬼気迫る取材活動を展開していた。
ぼくたちふたりのスクープは連日紙面のうえで競い合っていた。

編集会議で顔を合わせると純子は言ったものだった。

「高野君、明日の朝刊にきみの記事なんか一行のスペースもあげないわよ」

彼女の鼻っ柱の強さは、社内の女性記者のなかでもダントツだった。彼女はその後、社会部内
で順当に「出世」し、いまでは警視庁担当になっている。一方のぼくの方は科学部に転出してし
まったので、それ以後スクープ合戦の鞘当ての機会はなくなった。

しかし、いまからちょうど一年まえのこと、彼女がキャッチしたある事件で、彼女にとって非
常に不愉快なことが起こった。ネタは宇宙機器メーカーの不正輸出事件である。ことが宇宙に関
わっているというだけの理由で、科学部のぼくが取材のサポートにあてられ、結果としてそのス
クープの半分の名誉をいただくことになってしまった。そのことが彼女のプライドをひどく傷つ
けた。

「今回の事件はわたしひとりで十分だったのよ。そこんところ誤解しないでね」と純子は社内月
間スクープ賞の授賞式の直後に勇ましいタンカを切った。

そして今回、ぼくが社会部に呼ばれたのは、明らかにあのときと同じパターンだった。

「でも、まあ仕方がないわね。今度のはわたしの独自ネタじゃなくて、警視庁発表の解釈の問題だから。不審な点があるかどうか、科学部に目を通してもらって上からのお達しなのよ」

そう言つて純子は、深々とタバコを吸い込んだ。

「悪いこといわないからタバコやめなよ。きみみたいに小柄な人がタバコなんか吸ったら、体じゅうあつという間にニコチンだらけになってしまうよ」

「大きなお世話！」

「じゃあ、ぼくと話をしている間だけはやめてくれないか。気が散つて仕方がないんだ」

「そんなら高野君もわたしの気が散らない程度のましな身なりしてきてくれるかしら」

ぼくが純子のとなりの椅子に腰掛けると、純子は三枚の写真を机のうえに並べた。一枚目はボヤかなにかで焼け焦げたマンシヨンの写真だった。いくつかの窓ガラスが粉々になって砕け散っている。二枚目は室内に散乱している金属の破片の写真だった。そして三枚目の写真には、なにかの機械部品や電子部品がズラリと並べて写っていた。

「きのうの蒲田の爆発事故についてさっき警視庁で記者発表があつたの。とりあえずこれをまず先に読んでくれれば話は早いわ」

純子がさし出したのは翌日の朝刊用の原稿だった。見出しには、「大やけどの男性、ミサイル弾を製造？」とあつた。要約するとこんなふうになる。

爆発事故が起きたマンシヨンの部屋は、過激派ヤマネコ・アーミーの主要メンバー名義のものと判明。爆発現場から全身に大やけどを負つて救出された男性は同グループのメンバーと思われる

る。現場からは火薬の原料になる硝石^{しょうせき}、硫黄^{いっげう}などが大量に発見されている。さらに小型ミサイルのような形の金属ケースも見つかった。このため警視庁では、この男がテロに使用する目的で小型のミサイルを製造中に、なにかの原因で火薬に引火し爆発事故を起こしたものとみて、男の意識が回復するのを待っている。

「どう思う？」

「どうって、簡単なロケット弾を使ったテロなんていまに始まったことじゃないだろ。火薬の調合中にドジるなんて間の抜けたテロリストだよな」

「それが今回はいつもとはちがうらしいのよ」

「どこがどうちがうの。ぼくにはさっぱりわからない」

「ぼくの頭のなかには、まださっきの宇宙開発事業団予算の原稿を書いていたときの苛立ちが残っていて、自然と語気が荒くなった。」

「警察の担当者の話だと誘導装置やら噴射の制御やら、いろいろと複雑な装置がついていて、いままで見たこともないくらい高度なものらしいのよ」

「誘導装置ねえ」

「そんなのなにかのまちがいだろうと心のなかで思った。過激派がつくるミサイルなんて花火みたいなもので、飛んで行く方向を制御する高度な装置なんて聞いたことがない。目標の着弾点に向かって当てずっぽうに角度を決めてブツ放すという、言ってみれば約七〇〇年まえの元寇^{げんこう}のさいに蒙古軍が使っていたものかといいたくして変わらない原始的なものだ。」

「それに……なんて言ったかしら……化学物質の……」純子は自分のメモをめくった。